

# モンゴルの移動式住居「ゲル」の暖房

羊毛フェルトと畜糞燃料

風戸真理 (北星学園大学短期大学部専任講師)

## トクソク

節分が過ぎ、関東以西では春の息吹が感じられるようになった頃であろうが、筆者の住む北海道は5月頃までストーブを焚く。今回は、北海道よりもいっそう高緯度にあつて内陸性気候のモンゴル高原で移動式天幕「ゲル」に住んでいる遊牧民の生活を紹介したい。とくに、住居を暖める方法为例にあげ、徹底的に畜産物に依存した牧畜生活のあり方を紹介したい。

## モンゴルの自然と生業

モンゴル遊牧民とは、家畜を草地で採食させながら飼養し、草地を求めて居所を移動しながら生活する。モンゴル語を話す人びとである。モンゴル系諸民族は

モンゴル国をはじめ中華人民共和国とロシア連邦に主に暮らしている。

モンゴル国の自然環境は寒冷と乾燥を特徴とする。気温は夏はプラス30度、冬はマイナス40度まで下がる。年平均降水量は100〜400mm程度と少ない。モンゴルの牧民は、そのような環境において、ウシ(ヤクを含める)・ウマ・ヒツジ・ヤギ・ラクダを飼養してその畜産物に依存して生計を立てているのである。主な換金畜産物は肉とカシミヤ毛であり、それに加えて乳製品と羊毛を販売している。

## 移動式住居「ゲル」の羊毛フェルト

彼らの住居「ゲル」は、直径が約450〜600センチで、肩ほどまで高さの円柱に、円錐形の天井がのった、高さ約220〜250センチの組み立て式天幕であ

る。ゲルは木製の骨組みと羊毛フェルト、そして木綿等の布製のカバーと紐綱類からなる。ひとつのゲルに住むのは原則として、核家族つまり夫婦と未婚の子どもらである。

羊毛フェルトは耐熱性・断熱性の高さの特徴とする不織布であり、工業分野でも断熱材として用いられている。ゲルの部品となるフェルトの厚さは約5センチで、天窓に1枚、壁に3枚、天井に2枚が夏用のセットである。これらは、照りつける太陽光を遮って快適な居住空間を作り、オオカミなどの外敵や夜の冷え込みから家族を守る。冬には壁と天井を2重にする。冬のゲルは、厚さ約10センチの空気の層を包み込んだフェルトの壁ですっぽりと包まれているのである。

写真1は冬営地に引越してきた牧民



写真1 ゲルを、つぎがあてられた巨大なフェルトで二重におおう



写真2 ヤクの糞もウシの糞と同じくよい燃料となる



写真3 畜糞をくべたかまどで調理した料理を食べ、暖をとる女性たち

なるが、これらは爪の先ほどの小さな粒である。これを燃料にするためには、ヒツジ・ヤギが夜に眠る場所に堆積して踏み固められた糞を、秋にシャベルでブロック状に割り出し、乾燥させて燃やすのである。このように、排泄物である畜糞に、労働投下がなされることでエネルギー資源に転換されるのである。

が、ゲルにフェルトの天井をかぶせているところである。フェルトは自分の家のヒツジの毛で自作したものである。フェルトは使用と移動を繰り返すうちに、摩耗したりネズミや昆虫に食われて穴があくことがあるが、何重にもつぎをあてて10〜30年間にもわたって使われる。

## 畜糞燃料

ゲルを内部から暖めるのが金属ストロブとそれにくべる燃料としての畜糞である(写真2)。モンゴルの砂漠性草原には木が少なく、燃えるものといえば家畜

の糞である。燃料としての畜糞を加工し、採集・保存するのは主に女性の役割である。

畜糞のなかでもっとも燃料として人気が高いのが牛糞であるが、これは排泄されただけの糞ではない。朝晩、ウシの乳を搾る広場のまわりには多くの牛糞が落とされるが(写真3)、女性たちはウシの搾乳のあいまに、生乾きの糞がウシに踏まれないように集める。そして、糞虫や雨に分解されないよう、片面が乾いたらすばやく表裏を返すことにより急速乾燥させる(ヒツジとヤギの糞もよい燃料に

モンゴルの遊牧民は、寒冷と乾燥という自然環境の制限のもとで、5種類の家畜を飼い、その畜産物によって、食物・現金稼得・住居・エネルギー資源をはじめとする生活のあらゆる局面を支えているのである。

かざと まり 北星学園大学短期大学部専任講師。モンゴルをはじめとしたユーラシアの国々で物質文化に注目しながら牧畜および移動にかかわる社会・文化を研究している。

(「世界の農場から」は今号で終了いたします)